目白大学　総合科学研究
第18号　2022年2月　95-107

論文

1970年代前半の日本におけるDIY/日曜大工イメージ
―日本日曜大工クラブ機関誌『月刊手づくり』の内容分析を通して―

The Image of DIY/Sunday Carpenter in Japan in the early 1970s
―Through a content analysis of the bulletin magazines of the Japan DIY Club―

溝尻　真也
(Shinya MIZOJIRI)

Abstract：
This paper clarifies the images of DIY/Sunday Carpenter, which spread in Japan from the late 1960s to the 1970s as a handicraft hobby carried out mainly by men, and how it took root throughout the country. As a result of a content analysis of the bulletin magazines of the Japan DIY Club, an organization that gained members up to 45,000 during this period, it became clear that various kinds of activities were represented as DIY/Sunday Carpenter, such as making furniture and maintaining and repairing houses. In addition, it became apparent that DIY/Sunday Carpenter at that time was described with the images of craftsman devoting himself to manual labor.

キーワード：ドゥ・イット・ユアセルフ、日曜大工、イメージ、職人
Keywords：Do It Yourself（DIY）, Sunday Carpenter, Image, Craftsman

1. はじめに

本論は、主に1970年代の日本で男性によるものづくり趣味として定着したDIY/日曜大工について、この時期にDIY/日曜大工がどのようなイメージとともに普及したかを明らかにするものである。

本論におけるDIY/日曜大工は、家庭内設備や日用品の製作・補修・装飾を、家の所有者自身が行う行為を指している。DIY（Do It Yourself）は、厳密にはアマチュアによる音楽・映画・雑誌などのコンテンツ制作や、料理、裁縫、さらに家庭教育や住民による自治などまで含み得る幅の広い概念だが、本論においては、「家の所有者が、プロの専門家に依頼するのではなく、アマチュアである自分たち自身で自分たちの時間を使って行う、家のあらゆる部分に対する装飾、改造、建築、維持・補修」（Mackay &Perkins, 2017, p.758; Jackson, 2010, p.8）という、最も人口に膾炙しているであろうDIYの定義を用いることとする。さらに、日本では長きにわたりDIYと同義的に使われてきた日曜大工を併記しながら論じていく。

日本において趣味としてのDIY/日曜大工が普及・定着したのは、1960年代後半から1970年代にかけてである。そして、この時期のDIY/日曜大工の盛り上がりを象徴していたのが、1960年に漫画家・松下紀久雄が設立した日本日曜大工クラブの急拡大であった。日本日曜大工クラブは元々芸能人による親睦団体として設立されたが、その後1969年に一般会員の募集を

溝尻 真也：メディア学部 メディア学科 准教授

始めると、松下の巧みなメディア戦略の下、クラブはわずか4年の間に4万5000人の会員を獲得するに至った。

本論はこの日本日曜大工クラブの機関誌として発行された雑誌『月刊手づくり』[1)]の内容分析を通して、当時その趣味人口を増やしつつあった1970年代前半のDIY/日曜大工がどのようなイメージとともに普及していったのかを明らかにする試みである。

2．問題の所在と調査の概要

（1）日本におけるDIY/日曜大工の展開

DIYおよび日曜大工という言葉が日本で散見されるようになるのは、1950年代である。溝尻（2019）は、日曜大工という言葉が公の場で使われた最初期の事例として、1952年に雑誌編集者の片山龍二が、自身が編集する女性向けのムック本に掲載した「二人は愉しい日曜大工」という読み物を挙げている。これは、自分たちが住む家の庭に小さなコテージを自作した夫婦の体験談を物語にしたものだった（溝尻, 2019, p.288）。さらに片山は、1958年に出版した子ども向けの工作本『たのしい日曜工作』の扉ページに「DO IT YOURSELF 自分で作りましょう」というキャッチフレーズを掲げており、ほぼ同時期にイギリスで流行していたこの言葉を自著にいち早く取り入れている（溝尻, 2019, p.290）。

この「二人は愉しい日曜大工」に典型的に見られるように、初期のDIY/日曜大工は家族が力をあわせて家の美化や改善に取り組む家庭主義的な余暇活動として描かれており、そこには当時流行していたアメリカのホームドラマの影響を見て取ることができる（加藤, 1960, p.173）。しかし家族全員で大規模なプロジェクトに取り組もうにも、当時の日本は住宅環境をはじめとする社会的条件が整っておらず、DIY/日曜大工は次第に家庭主義的な余暇活動から「『家族のために』という建前で男性が余暇時間に単独でおこなう手作り」（溝尻, 2019, p.296）へと変質していった。

日本で趣味としてのDIY/日曜大工が本格的に普及したのは、1960年代後半から1970年代にかけてであった。溝尻（2019）はこの時期にDIY/日曜大工が普及した背景として、ベビーブームの世代が自身の住まいを持ち始める過程で起きた深刻な大工不足と、旺盛な住宅需要に応えるべく規格化され大量生産・供給された住宅に、自らの手でアレンジを加える欲求が高まった点を挙げている（溝尻, 2019, p.297）。

1960年代末から1970年代半ばにかけて起きた日本日曜大工クラブの急拡大は、この時期のDIY/日曜大工への関心の高まりを象徴する事象といえるだろう。理事長を務めた漫画家の松下紀久雄は、自らメディエイターとしてテレビ番組への出演や雑誌・書籍の刊行を精力的に行い、カリスマ的な人気を獲得した。同時に、「日曜大工センター」等の名称で一般消費者向けの小売店を展開しようとしていた金物店や材木店を組織化してクラブと連携させることで、業界とDIY/日曜大工行為者の双方に利益をもたらす関係の構築を試みた。さらに「趣味と実益の両立」「工業化への反発と人間性の回復」という思想を掲げ、DIY/日曜大工の普及に努めた人物でもある（溝尻, 2020）。

この松下紀久雄が創刊した雑誌が、日本日曜大工クラブの機関誌『月刊手づくり』だった 。松下ら日本日曜大工クラブの有志がヨーロッパを視察した際に、イギリスのDIY行為者の間で月刊誌*Do it yourself*（1957年創刊）が人気を得ていたことに触発され、それまで機関紙として月2回発行していた『日曜大工新聞』をリニューアルする形で創刊したのが、この『月刊手づくり』であった。管見の限り、DIY/日曜大工の関連情報に特化した日本初の定期刊行雑誌である。雑誌は会員に配布されるほか、松下が組織化したDIY/日曜大工用品の小売店や、一般書店でも販売された。雑誌の内容としては、松下紀久雄の巻頭言に始まり、さまざまな日用品の作り方を伝授する製作記事やノウハウ・作例の紹介記事、そして手づくりに関連する人物や事象にまつわるルポルタージュなどが毎号掲載されていた。

以下、本論ではこの『月刊手づくり』の内容分析を通して、日本で普及期にあったDIY/日曜大工がどのようなイメージで表象されていたかを見ていくことにしたい。

（2）調査概要

『月刊手づくり』は、1972年5月の創刊号から1976年9月の最終号まで月1冊、計53冊刊行された。今回調査対象としたのは国立国会図書館で閲覧可能な48冊に、筆者が独自に入手した3冊を加えた51冊である。なお1973年2月号と3月号は現段階で現物を確認することができていないため、今回の分析対象からは除外している。

調査方法としては、この51冊に掲載されていたすべての記事を27のジャンルに分類し、各ジャンルの全ページに占める割合を集計した。さらに広告を除くすべての記事タイトルをデータ化した上で、KHCoderを用いたテキストマイニングを行い、記事の傾向を分析した。その上で『月刊手づくり』に特徴的に見られる記事を採り上げ、内容を類型化しながらこの雑誌が描き出そうとしていたDIY/日曜大工のイメージについて分析した。

3．調査結果

（1）記事ジャンルならびに記事タイトルの分析

記事ジャンルの詳細と各ジャンルのページ数および全ページに占める割合を、表1に示す[2)]。全ページに占める割合が最も高かったジャンルは、ノウハウ・作例紹介（1697.39ページ，23.9%）である。製作記事（木工）（319.61ページ, 4.5%）、および製作記事（その他）（431.46ページ, 6.1%）とあわせて、製作のためのノウハウや事例紹介ならびに実際の製作の詳細な手順を紹介する記事が、全体の34.5%を占めた。

次に多かったのが、広告（668.96ページ, 9.4%）、商品紹介（482.04ページ, 6.8%）、店舗紹介（160.49ページ, 2.3%）、イベント紹介（90.33ページ, 1.3%）など、読者に商品や店舗・イベント等を紹介するページで、この4ジャンルで全体の19.8%を占めた。内容はDIY/日曜大工の素材や工具の宣伝、ならびにそれらを取り扱う小売店の紹介が主である。この雑誌が当時のDIY/日曜大工関連産業にとって重要な広告媒体になっており、同時に雑誌を発行していた日本日曜大工クラブにとっても、その広告料が欠かせない収入になっていたことが窺える。

人物ルポ（487.5ページ, 6.9%）およびその他ルポ（367ページ, 5.2%）は、あわせて12.1%を占めていた。人物ルポは、クラブ会員や職人などの実際に手づくりを行っている人びとに、編集部の記者や外部ライターがインタビューを行い記述した記事である。またその他ルポには、さまざまな街の風土を紹介する紀行ルポなどが多く見受けられた。これらのルポルタージュ記事は『月刊手づくり』の中でも目立って特徴的な記事群であるため、その内容については後に詳細に分析する。

その他の特徴としては、素材や道具に焦点を当てた記事（材料・素材 175.25ページ, 2.5%、道具（電動以外）277.5ページ, 3.9%、電動工具149.5ページ, 2.1%）が、8.5%の割合で掲載されていた。これらの記事には、初心者向けの基礎的な情報を提示する記事からコンクリートの使い方といった上級者向けのノウハウまで多様な領域が含まれており、この雑誌が幅広いレベルのDIY/日曜大工行為者に、道具の使い方や材料・素材に関する知識を伝授する役割を担っていたことが窺える。

続いて記事タイトルのテキストマイニングを行い、出現回数11回以上の頻出語句95語を抽出した上で、それらを行為に関する語句、行為対象に関する語句、道具・素材に関する語句、その他に分類した。その結果を示したのが表2である。

まず行為に関する語句を見ると、手づくり/手作り（計142回）、DIY/D.I.Y（計35回）、日曜大工（117回）、DO IT YOURSELF（26回）といった、この雑誌の主題となっている語句が目につく。また、作る（52回）、作り方（44回）など、製作に関する語句が多用されているのも特徴であろう。

さらにDIY/日曜大工の具体的な内容を示す語句として、塗装（80回）、修理/補修（計56回）、工作（46回）、手入れ（15回）、改造（12回）、飾り（12回）などを見て取ることができる。本論第1節で「家の所有者が、プロの専門家に依頼するのではなく、アマチュアである自分たち自身で自分たちの時間を使って行う、家のあらゆる部分に対する装飾、改造、建築、維

表１　『月刊手づくり』記事ジャンルの区分

	記事ジャンル	ページ数	全ページに占める割合	詳細
1	ノウハウ・作例紹介	1697.39	23.9%	手づくりその他に関する事例や手順、コツなどを紹介する記事。ただし細かい図面や寸法などが掲載されており、指示通りにすれば誰でも同じものが作れる記事については「製作記事」に分類した。
2	製作記事（木工）	319.61	4.5%	図面や寸法とともに誰でも同じものが作れる製作手順が紹介されているもので、木材のみで作れるもの（釘・紐など木材を組み合わせるための材料や、塗料やニスなど木材を直接塗装するための材料を用いた場合もここに含む）。
3	製作記事（その他）	431.46	6.1%	製作記事のうち木材以外の素材も必要なもの（木材に貼る布や壁紙なども含む）。ただし布をメインにした製作記事は「手芸」に分類した。また、織物・染物・陶芸・園芸・料理に関する製作記事も各ジャンルに分類した。
4	補修・修理	182.82	2.6%	掃除を含む。
5	材料・素材	175.25	2.5%	塗料や接着剤に関する記事を含む。
6	道具（電動以外）	277.5	3.9%	同一記事内に電動工具とその他の道具の双方を含む場合、より言及の多い方のジャンルに分類した。
7	電動工具	149.5	2.1%	電動工具の特徴や使い方等を紹介したもの。電動工具を使った具体的なものの製作方法を紹介した記事は「ノウハウ・作例紹介」もしくは「製作記事」に分類した。
8	手芸	192.41	2.7%	布・紙を主体とした手づくり。織物・染物は除く。人物を紹介する記事は「人物ルポ」に分類した。
9	織物・染物	23	0.3%	職人など、人物を紹介する記事は「人物ルポ」に分類した。
10	陶芸	43	0.6%	職人など、人物を紹介する記事は「人物ルポ」に分類した。
11	園芸	210.67	3.0%	職人など、人物を紹介する記事は「人物ルポ」に分類した。
12	料理	80.74	1.1%	職人など、人物を紹介する記事は「人物ルポ」に分類した。
13	人物ルポ	487.5	6.9%	本人への取材に基づいて書かれた、特定の人物を紹介することを目的としたレポート記事。
14	その他ルポ	367	5.2%	取材・調査に基づいて書かれた、特定の人物に焦点を当てたものを除くレポート記事。ただしDIY/日曜大工と無関係なルポは「その他記事」に分類した。
15	エッセイ	131.57	1.9%	松下紀久雄による巻頭言および編集後記は含まない
16	対談・座談会	65.5	0.9%	
17	投稿	84.96	1.2%	読者本人による投稿に限定し、編集部の記者が読者に取材して書いた記事は、「ノウハウ・作例紹介」や「製作記事」等に分類した。また記者が読者を紹介した記事は「人物ルポ」に分類した。
18	活動紹介	109.83	1.5%	日本日曜大工クラブなどの行為者団体が主催した手づくり活動の紹介。ただしクラブ主催のものであっても、工具展示会等の商業イベントは「イベント紹介」に分類した。
19	商品紹介	482.04	6.8%	編集部による、記事の体裁を取った広告ページを含む。
20	店舗紹介	160.49	2.3%	
21	イベント紹介	90.33	1.3%	日本日曜大工クラブを含む団体・企業が主催する商業イベントの紹介。
22	目次	102	1.4%	
23	巻頭言	46	0.6%	毎号松下紀久雄が記していた巻頭言。
24	編集後記	39.29	0.6%	
25	バックナンバー一覧	55	0.8%	
26	その他記事·紹介·読み物等	415.73	5.9%	上記のジャンルにあてはまらない、広告以外の記事・紹介・読み物など。
27	広告	668.96	9.4%	
	計	7089.55	100%	

表2『月刊手づくり』記事タイトルの頻出語句一覧

行為に関する語句		行為対象に関する語句		道具・素材に関する語句		その他の語	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
手づくり	130	椅子	41	道具	33	月	36
日曜大工	117	棚	36	合板	24	家庭	26
塗装	80	テーブル	34	パイプ	18	世界	26
作る	52	壁	30	塗料	18	特集	24
工作	46	人形	28	電動工具	16	講座	21
作り方	44	スタンド	25	タイル	15	知識	20
修理	43	花	21	紙	15	センター	19
DO IT YOURSELF	26	箱	21	工具	13	日本	18
DIY	20	庭	20	コンクリート	12	大工	17
楽しむ	17	キャビネット	19	鋸	12	職人	16
D.I.Y	15	電気	19	接着剤	12	工芸	16
手入れ	15	イス	17	電動	12	ミニ	15
塗り	15	家	17	木材	12	時代	15
作業	14	屋根	16	ドリル	11	種類	15
使い方	14	家具	16	材料	11	東京	14
工夫	13	時計	15			年	14
塗る	13	机	14			話	14
補修	13	ヨット	13			アイデア	13
利用	13	絵	13			コーナー	13
クラフト	12	住まい	13			コンサルタント	13
改造	12	ワゴン	12			自分	13
手作り	12	玄関	12			子供	12
飾り	12	キャンドル	11			入門	12
設計	12	ペンダント	11			養成	12
見る	11	鎌倉彫	11			ガイド	11
		菜園	11			クラブ	11
						シリーズ	11
						簡単	11
						丸	11

持・補修」というDIY/日曜大工の定義を提示したが、雑誌内でも、おおむねこの定義に含まれる行為が幅広く採り上げられていることが分かる。その中でも特に多く見られたのは、塗装、修理・補修、工作に関する記事であった。塗装は、ドアや玄関、屋根など、屋外から見える部分を塗り替えるためのノウハウを教示する記事が多いが、「勉強机の塗装」「花瓶の塗装」など、室内の家具や日用品に色を塗る方法を紹介する記事も散見された。修理・補修は、屋根、外壁といった外装に関する修理方法を紹介するものから、浴槽、雨戸、ガラス戸など屋内設備の修理方法、さらには靴やハンドバッグ、アクセサリーといった服飾雑貨の補修方法を解説する記事も見られた。工作は「夏休み工作」「子供用工作」など、子どもでもできる比較的簡単な製作記事のタイトルで使用される傾向にあった。

行為対象に関する語句は、何を作ったり、塗ったり、修理したりするのかという、行為の目的語になり得る語句を指している。椅子（41回）、棚（36回）、テーブル（34回）、箱（21回）、キャビネット（19回）、机（14回）などは、その多くが製作の対象として採り上げられており、当時のDIY/日曜大工がどのようなものを作る行為としてイメージされていたかを窺い知ることができる。一方、壁（30回）や屋根

（16回）は、塗装や修理の仕方を伝える記事で使われていることが多い。

道具・素材に関する語句としては、合板（24回）、パイプ（18回）、タイル（15回）などの素材や、塗料（18回）、接着剤（12回）などの材料に関する語句が多く見られた。また、電動工具（16回）、鋸（12回）、ドリル（11回）など、具体的な工具に関する語句も頻出している。こうした素材・材料や工具についての情報提供も、この雑誌の重要な役割になっていたことが見て取れる。

（2）人物ルポにおける職人の描かれ方

前項までに見てきたように、DIY/日曜大工情報誌である『月刊手づくり』の中心を占めていた記事は、日用品の製作や、住まいの維持・補修のためのノウハウや手順などを紹介する記事であった。

一方、『月刊手づくり』のもう一つの特徴として、ルポルタージュ記事の充実度を挙げることができる。ルポルタージュ記事は人物ルポとその他のルポに大別することができるが、中でも人物ルポには全体の6.9%にあたる487.5ページが割かれており、これはノウハウ・作例紹介（1697.39ページ, 23.9%）、広告（668.96ページ, 9.4%）に次ぐページ数である。

人物ルポの中には、編集部の記者や外部のライターが日本日曜大工クラブ会員の自宅へ取材に赴き、その人となりを紹介する記事も含まれるが、一方でプロの職人の工房を取材し、その職人の仕事の様子やライフヒストリーを描くルポルタージュも多々見られる。実際、表 2 に示した記事タイトルのテキストマイニングでも、職人は出現回数16回の頻出語句に挙がっており、この雑誌が職人の存在を意識していたことが見て取れる。

『月刊手づくり』に掲載された人物ルポの中で最も典型的な職人語りが見られるのが、「宮本京二のトントン・ルポ」（以下トントン・ルポ）である。これは1972年 5 月の創刊号から1975年12月号までの 3 年 7 カ月、全44回にわたり連載された人物ルポで、『月刊手づくり』に掲載された連載記事の中でも最も長期にわたって連載されたコーナーだった。内容としては著者の宮本京二が、家具や金物、伝統工芸品等の工場や工房を訪ねて行った、職人へのインタビューが主である。記事は 3 ～ 6 ページで、ページ数の平均は4.26ページである。全487.5ページの人物ルポのうち、36.7%にあたる179ページをこのトントン・ルポが占めていた。なお今回対象とした42記事のタイトルおよびインタビュイーの属性を、表 3 に示す。

宮本京二は、1950年代からテレビドラマの脚本を手掛けていた脚本家である。また放送作家としてお笑いやバラエティ番組にも携わっており、松下紀久雄の名を一躍全国区にしたDIY番組「日曜大工110番」（1969年～ 1976年、日本テレビ）の脚本も担当していた（溝尻, 2020, p.5）。

以下本項では、トントン・ルポに繰り返し登場する言及について、

ⅰ）職人になった経緯
ⅱ）修行経験
ⅲ）製作工程
ⅳ）後継者に関する言及
ⅴ）道具に関する言及

の 5 項目に分けて分析していくことにしたい。

ⅰ）職人になった経緯

全42記事のうち、26記事（61.9%）に見られた言及である。ここでは主にインタビュイーの生い立ちや、どのようなきっかけで職人の世界に足を踏み入れたかが語られる。

職人の世界に足を踏み入れたきっかけとしては、貧しい家に生まれたインタビュイーが、職人のもとへ丁稚奉公に出されたパターンが数多く見受けられる。このパターンは、特に戦前生まれの職人が幼少期を語る際に特徴的に見られる語りである。たとえば次に挙げるのは、10才のときに丁稚奉公に出されたという足袋職人についての言及である。

> 10才の時に父親が株に手を出してすってんてんになり、一家離散しなければならなくなる。そして、実太郎氏は浅草の山谷にあった大和屋という当時一流の足袋屋に丁稚奉公にやられることになった。
>
> その時、小さい妹や弟が「兄（アン）ちゃん行か

表３　「宮本京二のトントン・ルポ」記事一覧

回	年	月	タイトル	インタビュイー	年齢	性別	職業等		備考	取材地
1	1972	5	東京のアメリカ人 金物もオーダーブックで本国へ注文	アレン・G・ コルティン	記載なし	M	軍属	米軍相模原キャンプ総務部	DIY好きなアメリカ人	東京都世田谷区
2	1972	6	椅子張り人生 クッションから覗いた新宿物語	山崎武男	45	M	椅子職人	株式会社山崎イス製作所社長		東京都新宿区
3	1972	7	海とヨットと若者と	八木牧末	22	M	学生	日本大学法学部３年在学中	ヨットを自作する大学生	神奈川県横浜市
4	1972	8	現代研ぎ師考　火花咲く農家の一隅	清水秀夫	52	M	刃物研ぎ師		本業の農業の合間にバリカンやハサミなどの研ぎをしている	東京都足立区
5	1972	9	桶屋聞き書　三〇〇年つづく江戸職人	倉前伊勢吉	70	M	桶職人	倉前製作所社長		東京都江戸川区
6	1972	10	あばたもえくぼ、今戸焼 鼻毛に苦労する紬尾吉平	紬尾吉平	54	M	陶芸家	紬屋社長	本業は老舗呉服屋社長。今戸焼に魅せられて２年前に弟子入り	東京都港区
7	1972	11	船とスコッチに魅入られた男 ±（プラスマイナス）10㎜に挑む船大工	飯田周一	46	M	船大工	M.1工作所	小型舟艇製作修理会社の主人	神奈川県藤沢市
8	1972	12	大山のコマ	播磨啓太郎	41	M	木挽師		大山名物の縁起コマを作る職人	神奈川県伊勢原市
9	1973	1	人力飛行８人のサムライ 大空に羽搏く青春群像	木村秀政 豊沢軍治 大学生８名		M M M	大学教員 および学生	日本大学理工学部機械科航空専修コース	人力飛行機を卒業製作する大学生	千葉県習志野市
10	1973	2	未確認							
11	1973	3	未確認							
12	1973	4	瓦づくり六代　息づまる炎との対決	清水親夫 清水春吉	24 68	M M	瓦職人	清水瓦店５代目と６代目		埼玉県羽生市
13	1973	5	人生横捨て身　笑泣庵閑話	池田忠雄	48	M	警察官		篆刻を趣味にする男性	埼玉県浦和市
14	1973	6	箱根細工覚え書　寄木で描く文様美	露木清吉	73	M	寄木細工職人	露木木工所		神奈川県小田原市
15	1973	7	鋏の総火造り　いまも守る職人気質の人々	保坂金治	55	M	鋏職人	兼吉製作所		東京都足立区
16	1973	8	祈りの木彫りタンス 泰山木が語る母娘の愛	佐藤雅子	記載なし	F	主婦	元人事院総裁で植物研究家・佐藤達夫の妻	木彫を趣味にする女性	東京都杉並区
17	1973	9	江戸千代紙　四代目「いせ辰」清談	広瀬辰五郎	67	M	千代紙職人	菊寿堂いせ辰４代目		東京都台東区
18	1973	10	オカリナに愛をこめて　ある作曲家の生き方	火山久	記載なし	M	オカリナ製作者		本業は作曲家	栃木県益子町
19	1973	11	木工具三昧　新婚旅行も道具行脚	土田一郎	46	M	目立て師・木工具収集家			東京都世田谷区
20	1973	12	光は心の中に　盲目の日曜大工さん	木内義弘	37	M	マッサージ師		盲目の日曜大工愛好家	神奈川県川崎市
21	1974	1	指物師一代　工夫に通わす職人気質	島崎国治	66	M	指物師			東京都荒川区
22	1974	2	娘とお茶と紙芝居 ビー玉メンコのある陶芸茶房	優田阿寒 優田露香	20代後半 10代後半	F F	陶芸茶店経営・娘紙芝居師		姉はデザイナー、妹は武蔵野美大の学生	東京都新宿区
23	1974	3	和紙の村　手すきにかける40年	久保昌太郎	56	M	手すき和紙職人			埼玉県小川町

24	1974	4	船渡の張り子 目なしダルマの里	松崎久男	48	M	郷土玩具製作者		本業は農業	埼玉県越谷市
25	1974	5	公害１号が生んだ葭 ヨシズ作り50年の記録	稲川専蔵	55	M	ヨシズ製作者			茨城県古河市
				稲川直吉	75	M				
26	1974	6	光三郎櫛談義　浅草に残る職人気質	峰川光三郎	82	M	櫛職人	よのや櫛舗６代目		東京都台東区
27	1974	7	自然美を小宇宙に　草木に寄せる労りと愛	中村是好	73	M	盆栽家		本業は俳優	東京都葛飾区
28	1974	8	長板中形染め江戸浴衣　型付け師六十年	清水幸太郎	77	M	型付け師			東京都葛飾区
29	1974	9	味噌は生きもの 高尾大夫と食べた仙台味噌	八木忠太郎	67	M	味噌蔵主人			東京都品川区
30	1974	10	足袋（たび）一筋に67年 足形でわかる横綱·大関	宮内実太郎	77	M	足袋職人	喜久屋初代		東京都墨田区
31	1974	11	筆盛り碁盤師 「血溜め」にまつわるエピソード	御厨良一	48	M	碁盤師			東京都新宿区
32	1974	12	大提灯、親子ばなし　浅草寺奉納パレード	五十嵐鉄雄	66	M	提灯職人	五十嵐商店店主		東京都台東区
33	1975	1	兄弟で築く琴づくり 春日部に根ずく楽器製作	佐藤隆	39	M	琴職人	佐藤製作所		埼玉県春日部市
34	1975	2	夜中ひそかな椅子づくり　名人浅五郎ばなし	関口浅五郎	78	M	椅子職人	関口木工所		東京都港区
35	1975	3	土臭さに通う人情　下町慕情・今戸焼	白井孝一	65	M	陶工			東京都台東区
36	1975	4	セミによせる防人の歌 簡潔、素朴な民芸竹細工	辻左近	57	M	竹細工師		本業は写真屋	東京都八王子市
37	1975	5	火床は生きもの　鍛冶屋冥利を語る刃物師	池上喬庸	51	M	刃物師			東京都中央区
38	1975	6	みがき３年ヘラ８年 仏師の落し子・鎌倉彫	木内晴岳	57	M	仏師	鎌倉彫協会会長	アマチュア木彫グループも主宰	神奈川県鎌倉市
39	1975	7	金工師一代　最後のキセル職人	吉田省吾	74	M	金工師			東京都文京区
40	1975	8	駿河に生きる紺屋職人　藍染め唐草模様	秋山浩薫	57	M	染師			静岡県静岡市
41	1975	9	土とタバコと廃校と　小砂の民芸窯	藤田博	48	M	陶工	藤田製陶所		栃木県那須郡
42	1975	10	主婦のユニークな創意と工夫 和紙人形訪問記	益子穂	52	F	和紙人形作家		主婦	千葉県市川市
43	1975	11	日本美のミニ芸術　廃品利用に冴えるカン	村田喜市	41	M	神輿製作者	相模屋店主	本業は魚屋	東京都八王子市
44	1975	12	名刀に化粧する研ぎ　現代研師見聞記	藤代松雄	60	M	日本刀研ぎ師			東京都千代田区

ないでおくれよォ！」って泣いたという。昔の丁稚奉公というものは、将来の職業を覚えるためということでなく、貧しいがための口減らしのためという方が大きな理由になっていたのである。そのために、親方の方でも丁稚の人権などは全く無視し、サイヅチ（足袋の仕上げに使う木槌）で頭を叩かれて、寝ずに働かされ、頭にコブの絶え間がなかったという。（「足袋（たび）一筋に67年　足形でわかる横綱・大関」1974年10月号, p.42, カッコ内は原文）

これに対して宮本は「１時代前の日本の社会にはそんな陰湿で醜いものがまかり通っていたことを、否定することが出来ないのである」（1974年10月号, p.43）と述べ、戦前の貧しい生活を過剰に美化することへの危惧を表明している。

その他職人になったきっかけとしては、親の後を継ぐパターンが多く見られる一方、明確に自らの意志で弟子入りしたパターンは、18歳で鎌倉彫りの職人に「玄関の土間に土下座をして３時間、一心に頼んだ」（「みがき３年ヘラ８年仏師の落し子・鎌倉彫」1975年６月号, p.60）ケースなど２例のみである。なお丁稚奉公は戦前・戦中に幼少期を過ごした世代にしか見られないことから、戦後の民主化が職人の世界に与えた影響を窺い知ることができる。

ⅱ）修行経験

全42記事のうち、16記事（38.1%）に見られた言及である。前述の職人になった経緯に続いて述べられることが多く、そのほとんどは修行時代の厳しさに焦点を当てた記述になっている。

多くの修行語りでは、時に暴力を伴う辛く長いしごきに耐えた経験に加えて、師匠や親方がものづくりのノウハウを明示的に教えてくれなかったことなどが語られる。

こんな父親のもとで、彼は14歳の時から小僧仕事をさせられ、きびしく仕込まれた。しかし、決して仕事は教えてはくれなかったし、彼も父親や職人たちの仕事を見て、見よう見まねで仕事を覚えていったのである。

職人の仕事というのは、教えて教えられるものでなく、自分の工夫で会得するしかないのである。自分で会得できない者には、いくら教えても無駄なことだろうし、自分以上の職人にさせるためには、なまじ教えない方がよいということを、昔の職人たちは仕事を通して知っていたと云える。（「長板中形染め江戸浴衣　型付け師六十年」1974年８月号, pp.34-35）

ここに表象されているのは、「厳しい修行に耐えながら、教わらず身体で覚える」という職人像である。体系立った育成システムを持たず、長い時間をかけて自分の身体で仕事を覚えていくそのプロセスこそが、一人前の職人になるためには必要不可欠なのであるという職人イメージを、これらの記事からは読み取ることができる。次に挙げる６代続く櫛職人の語りは、そんな職人像を端的に表しているといえるだろう。

この節はなんだって、手とり足とりして教えてもらわねえと、教え方が悪いなんて、自分のことをタナに上げて文句ばっかりいいやがる。職人の仕事なんてものは、教わるんじゃねえ、覚えるんだ。（「光三郎櫛談義　浅草に残る職人気質」1974年６月号, p.113）

記事ジャンルの構成比を見ても明らかな通り、『月刊手づくり』は、DIY/日曜大工行為者に製作の手順やコツなどさまざまなノウハウを伝達することを主目的にした雑誌であり、読者の多くは「厳しい修行に耐えながら、教わらず身体で覚える」というイメージとは対極にある、趣味として手づくりを楽しむ人びとであった。DIY/日曜大工の行為者たちは、職人に付与されていたこのようなストイックなイメージを、一種の憧れとともに受容していたのかも知れない。

ⅲ）製作工程

製作工程に関する言及は、全42記事のうち30記事（71.4%）と、今回設けた調査項目の中で最も多く見られたものである。

基本的にはそれぞれの職人たちの製作工程が淡々と紹介されるが、ところどころで、この製作工程を目の当たりにした宮本の感情が書き連ねられた文章も見られる。たとえば次に挙げるのは、鋏職人が地金を成型する過程を説明した後で、宮本が述べた一文である。

> 真赤に灼けた地金を、何度も叩きながら鍛えてゆく工程の中に、精進潔斎をして作業に当る刀鍛冶にも劣らない精神の緊張が要求される。それは「赤き心」という表現をもって、誠の心をあらわした大和民族にとって、真赤にもえる鉄を鍛えるということのなかに、造る者の赤き心を伝える願いをこめたのかもしれない。（「鋏の総火造りいまも守る職人気質の人々」1973年 7 月号, p.85）

ここでは自らの手で作り出そうとしている対象と対峙する職人の緊張感が、抒情的に描き出されている。また「大和民族」の「誠の心」という表現で、職人の仕事に日本人特有の精神性を見出そうとしているのも特筆すべき点であろう。

次に挙げるのは、昔ながらの手づくり味噌を作り続ける醸造所に取材を行いその製造工程を紹介した後、主人へのインタビューを引用している箇所である。

> 「もちろん、それは化学分析をしても出てこないかも知れないが、しかし、その味わいに、風味に、何かがある…その何かを大事にしたいために、昔からの醸造法を変えないでやってるんです。味噌は生きものですから……」
>
> 『味噌は生きもの』――こんな素晴しい言葉が、何気なく八木氏の口からつぶやかれるのも、いかに、氏が自分の家の製品に、いつくしみと愛情をもっているかを語るものといえる。そしてそのことは、いまの日本人が経済大国とやらになったのと引きかえに、みんな忘れてしまっていた、一番大事なことを思い出させてくれるのである。（「味噌は生きもの　高尾大夫と食べた仙台味噌」1974年 9 月号, pp.57-58）

ここでは製造される味噌が「生きもの」という比喩で語られている。そしていつくしみと愛情を持って「生きもの」を育てる職人の姿が、経済大国になった日本人が「みんな忘れてしまっていた、一番大事なこと」と対比される形で描かれている。

この時期、日本日曜大工クラブの理事長としてDIY/日曜大工の普及啓蒙に努めた松下紀久雄は、DIY/日曜大工に込められた思想として「工業化への反発と人間性の回復」を説いていた。松下は、大量生産品が使い捨てにされ公害が社会問題化していた当時の状況のもと、忘れられた人間性を回復する行為としてDIY/日曜大工を位置づけようとしていた（溝尻2020, p.8）。宮本のルポは、高度経済成長に伴って日本人が失ってしまったという「何か」を呼び戻す行為としての手づくりに、最も真剣に取り組む象徴的な存在として職人たちを描き出そうとしていたことが、これらの記述から見て取ることができる。

ⅳ）後継者に関する言及

後継者に関する言及は、全42記事中15記事（35.7%）に見られた。その多くは後継者不足に悩む職人たちの語りである。

宮本はこうした語りを、消えゆく日本の職人文化に対する哀惜とともに記述する。たとえば次に挙げるのは、後継者のいない刃物師を取材したルポルタージュの一部である。

> 彼はまた云う、『職人って不器用なのと違いますか……』
>
> 本当にその通りだと思う。不器用だからこそ、虚仮（こけ）の一念で、その仕事を一途にやり通しているのだろう。器用な者は、目先きの利にひかれて、転々と仕事を変えている。そして、現在はあまりにも器用な人間が多すぎるように思われてならないのであ

る。(「火床（ほど）は生きもの　鍛冶屋冥利を語る刃物師」1975年 5 月号,p.45）

さらに後継者のいないキセル職人に取材した際も、宮本は以下のように記述している。

> その技術が彼一代で失われてしまうことに、彼はあまり悲観はしていないように見える。いや、むしろ、自分がキセル作りの最後の職人になることに安んじているようにさえ見える。
>
> それは着物から洋服への大きな変革につれて、キセルが無惨に捨て去られていった時代にも、ただひとりキセルを作りつづけたという職人の誇りなのかも知れない。(「金工師一代　最後のキセル職人」1975年 7 月号, p.48）

これらの記述が描き出そうとしているのは、大量生産の時代の中で遠からず消えゆく運命にあっても、誇りを失わず、不器用かつ一途にものづくりに取り組む職人の姿である。製作工程に関する言及の分析でも論じたように、宮本は職人の中に、高度経済成長に伴って日本人が失ってしまったという人間性――記事内では仕事に対する「誇り」や「一途さ」「不器用さ」といった言葉で表現されている性質――を見出しているのである。

v）道具に関する言及

道具に関する言及は、全42記事中15記事（35.7%）に見られた。「手づくりの椅子を支える道具類　そのひとつひとつに職人の血と汗がしみ込んでいる」(「名人浅五郎ばなし 夜中ひそかな椅子づくり」1975年 2 月号, p.64）という一文に典型的に見られるように、道具は職人の仕事を支える重要な存在として、写真とともに言及されることが多い。

稀に電動工具が使われることもあるが、言及される道具のほとんどは手道具である。中には道具自体を手づくりする職人もおり、職人として経験してきた苦労や、それぞれの職人が持つ仕事へのこだわりが凝縮された存在として、道具は記述される。

たとえば寄木細工職人の露木清吉は、愛用の大型カンナについて「これは吾が家の宝ですよ」と語ったといい、それに対して宮本は「いつかご見学にみえられた皇后陛下が、この大カンナから削って出る薄い削り皮に賛嘆のお声をあげられたということも含めて、露木氏の一生の苦楽をみてきた愛しい道具なのであろう」(「箱根細工覚え書　寄木で描く文様美」1973年 6 月号, p.40）と説明を加えている。

木材や金属を切断し、削り、磨くといった、人間の手では不可能な工程を可能にしてくれる道具は、プロ・アマを問わず人間がモノを作り出す上で欠かすことのできない存在である。その意味では、道具の存在こそが人間を「作る人（ホモ・ファーベル）」にするといえるだろう。またアメリカの歴史学者Gelberは、20世紀前半のアメリカで、夫や父親が大工仕事を含む家庭内の便利夫（handyman）としての役割を引き受けるようになる過程について、かつて男性職人によって担われていた仕事を自ら道具を用いて行うことで、彼らは家庭の中で前世紀的な男性性（Domestic Masculinity）を維持しようとしたと論じている（Gelber, 1997, p.73; p.90）。宮本が記述した職人たちの道具語りは、DIY/日曜大工行為者である読み手に対して「作る人（ホモ・ファーベル）」としての自己や、自身が維持しようとしている家庭内の男性性を改めて意識させる語りとして機能していたのかもしれない。

手づくりの椅子を支える道具類　そのひとつひとつに職人の血と汗がしみ込んでいる

図1 道具の写真
（1975年2月号, p.64）

4．まとめ

本論では『月刊手づくり』の内容分析を通して、DIY/日曜大工が普及期を迎えていた1970年代前半の日本において、これらの行為がどのようなイメージとともに表象されていたかを明らかにしてきた。

まずジャンル毎の分量比較では、ノウハウや製作の手順を紹介する記事が最も多く、次いで道具や店舗などの情報を提供する記事・広告、さらにルポルタージュ記事が続いていた。また記事タイトルのテキストマイニングでは、椅子、テーブル、机、箱といった、木製の家具や日用品を表す語句が頻出しており、当時のDIY/日曜大工がどのような手づくりを指向していたかを読み取ることができた。一方、壁や屋根といった住まいの内外装に対して、塗装や修理を行う記事も数多く掲載されていたことが明らかとなった。ここから木工を中心とした手づくりのみならず、住まいの維持・補修もまた、当時のDIY/日曜大工を考える上で重要な要素であったことが見て取れる。

さまざまな既製品が手軽かつ安価に手に入るようになった今日、DIY/日曜大工は作ること自体に楽しみを見出す手づくり趣味としての側面が大きく採り上げられるようになっている。しかし松下紀久雄はDIY/日曜大工の思想として「趣味と実益の両立」を掲げており、実際『月刊手づくり』の誌面でも、作る楽しみの追求のみならず、実益をもたらすさまざまな行為のノウハウが紹介されていた。このDIY/日曜大工が内包する趣味と実益のバランスが1970年代後半以降どのように変化していったのかは、今後の重要な検討課題である。

さらに『月刊手づくり』の特徴的な記事として、人物ルポルタージュの存在が挙げられる。本論では人物ルポルタージュの中で最も多くの誌面を割いていた連載記事「宮本京二のトントン・ルポ」を採り上げ、その記事内容を分析した。その結果、厳しい修行に耐え、いまもなおストイックに手仕事に取り組む職人の姿が、高度経済成長期に日本人が失ってしまったという人間性へのノスタルジーとともに描かれていたことが明らかとなった。

『月刊手づくり』において職人の手仕事が大きく扱われていた点は、当時のDIY/日曜大工イメージを考える上で示唆に富む知見であろう。DIY/日曜大工は、作る楽しさと実益の両方をもたらす営みである一方、仕事に対する誇りや日本人が失ったという人間性を取り戻す営みとしても表象されており、これらのイメージが、一心不乱に手仕事に取り組む職人たちの姿に投影されていたといえるのではないだろうか。

最後に、本論が明らかにした1970年代前半におけるDIY/日曜大工と職人イメージの結びつきは、DIY/日曜大工という行為に付与されてきたジェンダー性について考える上でも有益であろう。この行為は長らく「日曜大工」という男性職人を想起させる言葉で呼び表されてきた。またそのために、この行為を行う女性の存在は近年まで不可視化されてきた。DIY/日曜大工にこうした男性的なイメージが強く付与され維持されてきた歴史的経緯と、2000年代以降このイメージが弱まり、女性のDIY行為者が可視化されるようになっていくプロセスもまた、今後の重要な検討課題である。

【参考文献】

Gelber, Steven M. (1997). Do-It-Yourself: Constructing, Repairing and Maintaining Domestic Masculinity. *American Quarterly*, 49 (1), 67–112.

Jackson, Andrew. (2010). Constructing at Home: Understanding the Experience of the Amateur Maker. *Design and Culture: The Journal of the Design Studies Forum*, 2 (1), 5–26.

加藤秀俊（1960）.「ホーム・ドライバーと日曜大工：非代理的余暇の問題」『中央公論』75（6），1970年6月号，中央公論社，169–177.

Mackay, Michael. & Perkins, Harvey C. (2017).The globalizing world of DIY house improvement: interpreting a cultural and commercial phenomenon. *Housing Studies*, 32 (6), 758–777.

溝尻真也（2019）.「日曜大工の社会史：男性の手作り趣味と家庭主義」神野由紀・辻泉・飯田豊編『趣味とジェンダー：〈手づくり〉と〈自作〉の近代』青弓社，286–310.

溝尻真也（2020）.「1960–70年代日本におけるDIY/日曜大工：松下紀久雄と日本日曜大工クラ

ブの軌跡から」『生活学論叢』36-37，日本生活学会，1−15.
『月刊日曜大工Do it yourself』67，1972年5月号—78，1973年4月号，日本日曜大工クラブ
『月刊手づくり』79，1973年5月号－107，1975年9月号，日本日曜大工クラブ
『月刊手づくり』108，1975年10月号—119，1976年9月号，日曜大工サービス

【注】

1）1972年5月号から1973年4月号までは『月刊日曜大工Do it yourself』として刊行され、1973年5月号から最終号となる1976年9月号は『月刊手づくり』という誌名で刊行されたが、本論では『月刊手づくり』で統一した。

2）なお1ページの3分の1程度を占める記事は便宜的に0.33ページとし、同様に4分の1ページは0.25ページ、2分の1ページは0.5ページとして計算した。そのため今回扱った資料の実際の総ページ数7090ページに対して分析対象としたページ数の合計は7089.55ページになっており、0.45ページ分のずれが生じている。